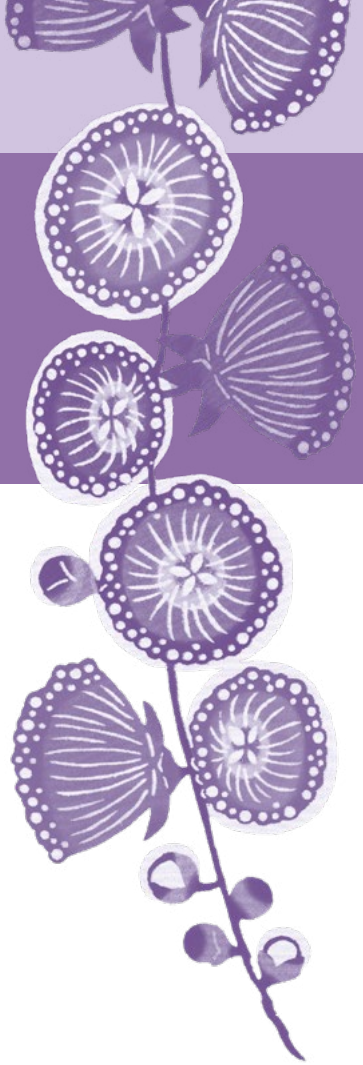
8章
学術研究

概説
上田礼子
大城道子
勝方＝稲福恵子
嘉手苅千鶴子
鎌田佐多子
喜納育江
當山冨士子
原喜美
外間米子
宮城晴美
もろさわようこ
コラム　琉球語と女性たち



8章

学術研究

復帰後の沖縄社会では、女性自身による多様な女性史研究が展開された。その多くは大学等の研究機関に所属しない人びとによる「在野」の研究であり、情熱をもった有志らの持続的な取り組みが研究を活性化し、重要な成果が生み出されていった。1990年代末から、その蓄積は『那覇女性史』や新沖縄県史の『女性史』の刊行へとつながっていった。また県内の地域史編さん事業においては、多くの女性たちが調査・編集を担い、事業の継続にとって不可欠な存在となっていった。県内の大学に目を向けると、琉球大学で女性学長が誕生するなど女性研究者の活躍の場が広がってきているが、総体的な女性教員の比率向上は十分ではなく、引き続き重要な課題となっている。

鳥山淳（琉球大学島嶼地域科学研究所教授）

女性史研究のうねり

復帰後の沖縄社会において明確なうねりとなったのが、女性が主体となった沖縄女性史研究の取り組みである。1974（昭和49）年1月には、沖縄の女性史に関心をもつ有志らによって「沖縄県女性史研究会」が組織され（深沢恵子を代表とする14人）、精力的に聞き取り調査を実施するとともに、その成果を含む多数の論考を収録した『沖縄女性史研究』（創刊号～第8号）を92年まで継続的に発刊していった。79年には日本の女性史研究家、もろさわようこの講演をきっかけにして「沖縄の女性史をひらくつどい」が始まり、その取り組みは90年代になると「歴史を拓くはじめの家ーうちなぁ」（うちなぁの家:もろさわようこ主宰）の開設へとつながっていった。

また83年には沖縄県婦人連合会の幹部を中心にして「沖縄婦人運動史研究会」が発足し、3年後には『沖縄・女たちの戦後ー焼土からの出発』（ひるぎ社、1986年）を刊行した。88年には、那覇市首里公民館で開催された女性史講座を契機に「沖縄女性史を考える会」が発足し、翌年には同会と公民館によって講座記録集が発刊された。さらに同会では、92（平成4）年に賀数かつ子、浦崎成子、河名恵子らを中心に日本軍の「慰安所マップ」を公表するなど、戦時動員に関する複数の研究成果を発表したほか、2013（平成25）年には賀数かつ子、比屋根美代子、山内るり、伊良部住恵の4名で、渡満者の悉皆調査を含む重厚な記録集である『沖縄と「満洲」ー満洲一般開拓団」の記録』（明石書店）を発刊した。

このような研究の継続・発展を背景にして、那覇市では「女性行動計画」の一環として92年から女性史編さん事業に取り組み、98年から2001年にかけて3冊の『なは・女のあしあと』（那覇女性史の前近代編・近代編・戦後編）を刊行した。また1994年から開始された『新沖縄県史』刊行事業においても、その計画に「女性史」の一巻が位置づけられ、資料編等の編集・発刊を経て、2016年に『沖縄県史各論編第8巻 女性史』が刊行された。

地域史編さん事業における女性たちの働き

沖縄の歴史・文化・言語・自然環境などに関する研究の発展と蓄積を振り返る際に、地域史(県史・市町村史・字史など)が担ってきた役割は非常に重要である。その嚆矢となったのは60年代に事業が開始された『沖縄県史』と『那覇市史』であり、70年代からは多数の市町村において歴史編さん事業が始まった。78年には、それらの編さん事業に取り組む担当者たちによって沖縄県地域史協議会が結成され、成果と課題を継続的に共有しながら各地の編さん事業を活性化する役割を担った。

資料の収集や聞き取り調査の実施など編さん事業を支える地道な作業には、多くの女性たちが参加している。地域史協議会が2011年に発刊した『琉球・沖縄の地域史研究ー沖縄県地域史協議会の30年ー』で各機関の活動報告を見ると、多数の女性たちが編さん事業の現場で活躍してきたことが分かるが、その多くが不安定な雇用制度の下で働いており、調査活動によって身につけた専門的な知見と経験を十分に活かすことができない構造的な問題が存在していた。地域史協議会は発足時から、そのような問題の改善を重要な課題としていたが、30年間の活動を経ても「若い人は臨時、嘱託で、現在もそう」であり、「編集が終われば終わりということではなく、地域づくりを担っていけるような人材を地域史協議会はつくるべき」という課題は変わっていなかった(同書260頁)。

地域史協議会の代表は各市町村史の担当者の中から選出されており、13年度に名護市史編さんの比嘉ひとみが女性として初めて代表となった。

県内大学における女性研究者の活躍

復帰前の沖縄では、1950年に米国軍政府によって琉球大学が設置され、66年から琉球政府立となった。私立大学としては、沖縄短期大学(58年)、沖縄キリスト教学院短期大学(59年)、沖縄大学(61年)、国際大学(61年)、沖縄女子短期大学(66年)が開学していた。

復帰に伴い沖縄大学と国際大学を統合して沖縄国際大学が開学した一方、沖縄大学の存続運動が起こり、74年に文部省の認可を得て開学となった。その後、沖縄県立芸術大学(86年)、名桜大学(94年)、沖縄県立看護大学(99年)、沖縄キリスト教学院大学(2004年)が開学した。沖縄県立看護大学の学長は、初代の上田礼子から第5代まで、すべて女性がつとめている。沖縄女子短期大学では、14年に鎌田佐多子が学長となった。琉球大学では25年に喜納育江が学長となったが、国立の総合大学で初めての女性学長である。

幅広い学問分野における女性研究者の活躍を確認する一つの目安として、県内の大学における女性教員の人数と比率の変化を見ておきたい。女性教員の人数と比率については学問分野によって違いが生じる傾向があるため、ここでは多分野の教員が在職する琉球大学の状況を参照する。

文部科学省が公表している大学基本情報によると、琉球大学における女性教員(専任教員)の人数および比率は、2015年から25年までの10年間で次のように推移している。

琉球大学における女性教員(専任教員)の人数および比率

	人数	比率
2015年	129人	15.5%
2020年	159人	19.2%
2025年	184人	23.2%

女性教員の人数は10年間で50人以上増加し、その比率は7.7%上昇している。この間の上昇ペースにおいて年ごとの変動は少なく、緩やかな上昇が続いている。県外の国立大学の平均値を見ると、女性教員の比率は15年の15.9%から25年の21.1%へと5%強の上昇となっており、琉球大学ではそれを上回るペースで上昇してきたことが分かる。それでも女性教員の比率は4分の1にも達しておらず、それを適切な水準にまで高める取り組みが引き続き求められる状況にある。

なお県内の公立大学における25年の女性教員の比率は、名桜大学が41.0%、県立芸術大学が35.7%、県立看護大学が71.7%となっている。

上田礼子

Ueda Reiko ● *1934-*

沖縄県立看護大学の初代学長「地域に立脚」を開学の精神に

看護を科学的に実践できる質の高い人材の育成を使命とし、沖縄の保健、医療、福祉の現場と学術的発展を支えてきた沖縄県立看護大学。初代学長として8年間を同大で過ごした上田礼子は、後進のよりどころとなる礎を築いた立役者である。

福島県出身。1953（昭和28）年に設置された東京大学医学部の衛生看護学科に一期生として入学した。当時の先生から「教わったことは今すぐ評価されるものではない。本当の成果は15年後くらいに評価される」と言われたという。礼子自身も、のちに「未来の人を育てるのが教育。学ぶべき時に学ぶことが将来への投資になる」と、長期的な視点で人材を育てる重要性を語っている。大学卒業後は米国ピッツバーグ大学大学院で修士課程を修了し、70年には東京大学で医学博士となった。

沖縄との関係は74年から。同年に始まった厚生省の乳幼児一斉健診事業で毎年、宮古と八重山を訪れていた。87年には沖縄県知事から感謝状を贈呈されている。沖縄の乳幼児を診ているうちに「沖縄の子どもは首すわりや歩行などの発達が早い」と感じ、地域の環境が子どもの発達にどう関係するのかが研究テーマのひとつになったという。

97（平成9）年に県立看護大学の設置顧問に委嘱され、99年4月の開学と同時に初代学長に就任した。「グローバルに考え、地域に立脚して活動する」という信条のもと、在任中は①教職員のためではなく、県民の健康、医療、福祉、看護に貢献する地域社会に開かれた存在になること②次世代を育成する学生、院生中心の教育を優先すること③急速に変化するグローバル化社会に対応できる21世紀の看護のリーダーシップを養成すること――の3点を重視した。

世界各地の看護の現状や課題を学ぶ「国際保健看護」という授業科目を開学当初から設けているのは、礼子の信条が色濃く反映された一例である。また、2004年の大学院設置も特筆すべき成果だ。その必要性を啓発する過程では「大学の内外で意見の相違があり、想像を絶する調整を要した」と苦労も多かったが、「大学は実践現場にある保健看護上の問題に先駆的に取り組み、解決を図る努力をし、それらを大学、大学院生の教育に生かすこと、すなわち実践、研究、教育の三位一体による創造的活動が求められている」という高い視座に立ち、支援の輪を広げて実現にこぎつけた。保健看護学研究科の前期課程と後期課程の同時設置は、看護系大学として全国初の事例だった。

任期の締めくくりとなった07年3月、同大が独立行政法人大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価において「大学評価基準を満たしている」との認定を受け、教育研究の水準を確固たるものとし、学長職を後進に託した。08年には同大第1号となる名誉教授の称号を授与された。研究者として培った豊かな知見は、県立看護大学のみにとどまらず、沖縄の看護分野全体の地平を押し上げたと言える。（長嶺真輝）

沖縄県立看護大の開学記念式典=1999年7月（琉球新報社提供）

大城道子

Oshiro Michiko ● *1944-*

（2012年9月撮影）

母と地域活動研究家として生きた半生 名護針突調査を出発点に

大城道子は、1944（昭和19）年9月に疎開先の熊本県飽託郡牟田口の農家納屋で、安里延（名護市世冨慶出身/教育行政官、沖縄史研究者）と母・初子（糸満市大里）の次女として生まれた。戦後の46年に母と道子らは熊本から沖縄へ引き揚げ、辛くも沖縄戦を生きのびた父と再会。その後道子は那覇の文化で育ち、首里高校を経て東京教育大学を卒業。沖縄に戻り社会人として短い教員生活（高校国語教諭）の後、父の故郷名護を拠点に母として5人の子育てをしながら地域活動研究家の第一歩を「名護博物館」開館準備時代にスタートさせた。

70年に1町4村による合併で誕生した名護市は、10年後の80年初頭、まちづくり（第1次基本構想）に力を入れていた。とりわけ名護市の社会教育（名護博物館、名護市史編さん室等）の活動は県内でも注目され、まちづくりは胎動期にあった。道子は育った那覇から父の故郷やんばる名護に居住を移し、新しい博物館をつくるという貴重な体験をとおして「母親業」と「地域活動研究家」の二刀流を始める。やんばるの人びとの生活聞きとりの研究成果は名護博物館紀要で発表され、同紀要創刊第1号に「ソテツを食べる」（85年）に始まり、「沖縄の紡績女工（一）―その実像を求めて―」など次々に紀要論文を発表し、どっぷり地域活動にはまっていく。研究活動の出発点となったのは「名護針突調査報告書」（名護市教育委員会、83年）による聞きとり調査。地域研究の原体験となった同調査で、道子が多くの高齢女性たち（紡績女工体験者）から聞きとりで得た情報は、それまで定説となっていた「女工哀史」的なものを越えて、出稼ぎで家計を支え「紡績は楽しかった」と嬉々として語るたくましい女性たちの生き様に光をあてるものとなった。

その後もう一つのライフワークとなったのは、先人の聞きとりとは別に自らの出生時期前後（43~45年）世代（太平洋戦争前後に誕生し、米軍占領下で成長し、日本復帰前後に家族をつくり、現在老年となる）の生き様を集め、沖縄戦を生き抜いたそれぞれの戦争と平和の語りを『赤ん坊たちの〈記憶〉』（牧歌舎、2012年発行）としてまとめることにつながっていく。この戦前・戦後を生きる人々の生活体験を研究する道子の遺伝子は、戦後復興時、沖縄の教育界の針路に尽力した父・延のDNAを想起させる。

道子の研究活動は戦前に海を渡り出稼ぎ女工として紡績で働いた女性たちを追い、海を渡り海外に移民として世界に出ていく人の移動を追う活動へ継承され、2018（平成30）年1月に発足した民間組織「世界ウチナーンチュセンター設置支援委員会」では、道子も会活動の重要な役割を担い、世界の県系人ネットワークの拠点となる「世界ウチナーンチュセンター（仮称）」の設置を沖縄県知事と沖縄県議会に要請してきた。

道子について、一言シマクトゥバで語るなら、「マクトゥー、マットォーバー」ということになろうか。（渡具知伸）

名桜大の「琉球文学大系」編集刊行事業の『おもろさうし 上』発売トークイベントに出た大城道子 =2022 年 8 月 21 日、那覇市のジュンク堂那覇店

（2014年撮影）

勝方＝稲福恵子

Katsukata Inafuku Keiko ● *1947-*

「うないイズムとしての琉球・沖縄女性像」早大で初の女性学講座開設

1947（昭和22）年9月12日、具志川村（現うるま市）平良川に、いずれも中学校教員であった父母の下に生まれた。恵子の祖母と母は、近代的同化教育が沖縄女性にも及び始めた時代に、乖離した異なる女性像を生きていた。祖母は琉歌をそらんじても文字は書けない口承文化の人。それに対し母は読み書きを得意とする近代日本女性。祖母の古層的な太母像と母の「良妻賢母イデオロギー」との確執は、沖縄を離れた恵子にとって「沖縄に戻るまい」という心情を形作った。沖縄と日本を象徴するこの二つの女性像を併せ持つ自己の二重意識は、折り合いもつかぬまま残った。

65年、高校3年生の時に上京し、日大二高女子部に編入。67年に早稲田大学第一文学部に入学し、現代アメリカ文学を専攻した。72年に同大学院に進学後、結婚、出産を経て、早稲田大学などで大学教育と研究に携わってきた。研究と教育の道を歩む中で、家事、育児、仕事、介護が重なる「冬の時代」を経験した。

この「冬の時代」を抜ける契機は二つあった。一つは、95（平成7）年に参加した「東京おきなわ女性の会」との出合いである。沖縄には戻らないと考えていた自身の思いがほどかれ、女性同士のつながりの中で大きくエンパワーされた。もう一つは、96年から1年間、娘を連れてニューヨーク市立大学に研究滞在し、多文化フェミニズムに触れたことである。黒人文化と抵抗の歴史を刻むハーレムに通い、10月12日のコロンブス・デイ――コロンブスの米大陸到達を記念する一方で、その後の植民地化の歴史を想起させる日でもあった――には、米国の国家や資本、白人エリートを象徴する五番街で、様々な民族の旗を掲げる人々のパレードに立ち合った。そこには、自らの肌の色を誇りとして生きる人々の姿があった。また、ニューヨーク沖縄県人会会長であった与那覇・トゥーシー・定子と出会い、古層性と近代性の併存する姿に惹かれた。

留学直前の94年に早稲田大学で初めて女性学の授業を開講し、95年の「米兵による少女暴行事件」の衝撃で、沖縄とジェンダー問題を考えるようになった。帰国後、97年にジェンダー・スタディーズの講義を設置・担当。2000年に同大学でジェンダー研究所の立ち上げに携わり、02年に沖縄文化協会賞（仲原善忠賞）を受賞した。06年には早稲田大学「琉球・沖縄研究所」を設立した。同年に刊行した『おきなわ女性学事始』では、「おきなわ」を平仮名で表記することで、単一の像に回収されない玉虫色のような主体像を志向した。12年、「沖縄女性学の構築―うないイズムの文化実践」により博士号を取得した。

80年代以降の沖縄のフェミニズム運動は、古くから姉妹を意味する「うない」という語に新たな意味を与え、多様な立場にある女性たちの連帯を指し示す概念として読み替えてきた。恵子は、この意味の更新された「うない」を思想化する試みを「うないイズム」と名づけ、「女性」という近代的主体概念ではすくい取ることのできない、植民地的近代に対抗する琉球・沖縄の女性主体が立ち上がる場を、コトバにしようとしてきた。（佐喜真彩）

最終講義をする勝方＝稲福恵子＝2018年1月、早稲田大学

嘉手苅千鶴子

Kadekaru Chizuko ● *1949-2001*

和琉文学の表現を比較研究
歌碑巡り、風土と文化の関わりも

1949(昭和24)年、久米島で生まれる。祖父祖母、そして両親も教員の家庭に育ち、家庭環境からも幼少期から読書や書くことが好きだった。幼い頃から自然や花が好きで、那覇に移り住んでからも日常の中で気に入った花を押し花にしたり、活けたりしていた。

琉球大学では池宮正治、仲宗根政善らから琉球文学を学ぶ。これらの琉球文化・言語・文学の先学に薫陶を受けたことは、後の千鶴子の研究に大きく影響する。72年に専修大学大学院文学研究科博士課程に進学する。万葉集研究の第一人者である伊藤博に師事し、記紀歌謡や風土記歌謡、万葉集、和歌を研究対象として歌謡の持つ性格や役割について研究を深めた。

78年帰沖し、琉球大学で非常勤講師として教鞭を執る傍ら、学術雑誌へ論文を発表していった。この時期の論文は、沖縄各地に伝わるクェーナやウムイなどの南島歌謡や『おもろさうし』、古典語辞書である『混効験集』についての論考で、おもに歌謡ジャンルの異なるウタの表現の比較研究であった。その代表的なものには「おもろさうしと万葉集」「おもろと万葉歌—航海に関わる表現よりみた—」がある。『おもろさうし』と『万葉集』の成立年代は大きく異なるが、古代的性格において深く関わりがあることを指摘しつつ、具体的な事象を対比することで表現態度の質的な相違を明らかにした。これまで自身が沖縄や東京で学びを深めたことを調和させたのである。結果的にこの時期の論考ですでに「和文学」と「琉球文学」における表現比較研究の基盤を確立した。

86年に沖縄国際大学文学部の専任講師として採用された。沖縄国際大学や法政大学沖縄文化研究所などを中心に論考を発表するとともに、池宮との共著『近世沖縄和歌集　本文と研究』、山下欣一ほか編『南島の文学・民俗・歴史』、藤井貞和ほか編『岩波講座　日本文学史』などに琉歌や琉球人和歌、そして南島歌謡における表現を中心とした研究を発表していく。また、98（平成10）年には地元である久米島仲里村（現久米島町）の『仲里村史』にも「仲里関係オモロ」を発表した。

嘉手苅ゼミでは、琉歌の研究を中心に置き、時には学生とともに沖縄各地の琉歌歌碑をめぐり、歌が風土や文化と密接に関わっている現場を学んだ。千鶴子の歌謡研究の基本は、対象となるウタの「いつ・どこで・だれが」といったいわゆる「5W1H」の基本構成を大切にして表現を読み解く、といったものだった。常々、学生へは琉歌やオモロについて歌人は何を想って歌ったのか、その心を作品から読み解くために、対象となる表現を琉球文学全体から事例を集めて考える、という手法を教授していた。さらに千鶴子は琉球の歌謡の魅力について、沖縄の固有の地名や特徴的な景観、そして名をあえて残さない庶民の生活感情が素直に表出されていることであると説いていた。それは幼少期から変わらぬ自然を愛でる「こころ」を南島歌謡に求めたからであろう。

2000年4月に沖縄国際大学の図書館長に就任する。教務が多忙となるなか、2001年3月4日に急逝。学生や研究者が惜しむ中、2002年、遺著となる『おもろと琉歌の世界—交響する琉球文学』が出版された。（鈴木耕太）

具志川村立（現久米島町）清水小学校時代に地区代表で「童話・お話・弁論の中央大会」に参加する嘉手苅千鶴子

（2025年12月撮影）

鎌田佐多子

Kamata Satako ● *1941-*

絵本通して人材育てる
県内に広がる心の豊かさ

新米教師時代、トランクいっぱいの絵本に衝撃を受けた。以来、突き動かされるように読書教育にまい進した。

1941（昭和16）年に那覇市で生まれた。両親とも教師の家庭に育ち、自然と教師を目指した。大学卒業時に「沖縄を飛び出してみたい」という気持ちを抑えられず、伯父を頼って上京。国立音楽大学附属小学校で低学年を中心に担当した。ベテラン教師の温かいサポートを受けながら教職のいろはを学び、休み時間には子どもたちとかけっこをする日々。子どもたちを集団でみるのではなく「一人一人に寄り添う」姿勢は、そんな環境で育まれた。

教育研究大会に参加した時、発表者が示したトランクいっぱいの絵本に目を奪われた。そして助言者として発言した児童文学作家・椋鳩十の「読み聞かせが幼児期の子どもの耳を育て、『感動』という宝の原石が心に蓄積されていく」という話に心をわしづかみにされた。椋が提唱した「母と子20分読書運動」が全国でブームとなっている時期。その日のうちに発表者の絵本研究会に入会し、読書教育にのめり込んだ。

30代のころ「わくわくを持って」沖縄に帰り、那覇市の与儀保育所で勉強会を立ち上げた。保育士や保護者の反応はすさまじく、会は熱気であふれた。だが復帰前の沖縄は流通が未発達で良質な絵本が乏しい。バザーを開いて捻出した費用で絵本を購入し、保護者へ貸し出した。子どもの本研究会の立ち上げに携わったのもそのころだ。会の取り組みで沖縄に招いた著名な作家や研究者から夢中で学び、つながりを深めていった。

73年に沖縄女子短期大学の講師に就任。米国での幼児教育研修が第二の転機となった。米国の学生は教員になるまでに、大学と大学院の6年で600冊の本を読む。とてつもない読書量に驚き、プロの卵を育てる教師として「先進国と同じレベルに持っていこう」と決意。沖女短に4000冊をそろえてもらい、学生には9カ月で絵本100冊を読む課題を与えた。子育てや介護をこなしながら、学生一人一人に向き合う日々。研究との両立に悩む時期もあったが「私の研究対象は保育現場。五感を通して濃厚に現場と関わり、子どもたちに研究成果を届ける」と覚悟を決めた。

2014（平成26）年、学長に就任した。那覇市から与那原町へのキャンパス移転など、大きな事業が重なる時期の決断の陰には「育ててもらった」沖女短と、女子教育の発展に尽力した創設者への感謝の気持ちがあった。重責に押しつぶされそうなこともあったが、「学生のために頑張ろう」と任務を全うした。

退任後、自宅での勉強会を再開した。本への興味は尽きることがなく「小さな子どもが絵本に触れて蝶々になったり雲になったり、いろんな人生を味わえるってすごいこと。豊かな人生のヒントになる」と語る。教え子たちが離島も含めた県内全域で読書や絵本の魅力を広げている。本の力を信じた歩みを振り返り「就学前の読み聞かせが、50年かけて根付いてくれた」と温かく微笑む。（與那覇裕子）

保護者講演会に招かれ、園児たちにお話をする鎌田佐多子＝2001年10月、嘉手納町

喜納育江

Kina Ikue ● *1967-*

平和支える人材の養成目指す
国立総合大、全国初の女性学長

（2025年11月撮影）

1967（昭和42）年、那覇市首里汀良町で電化製品店を営む両親の長女として生まれた。夫婦として父と対等な関係を築いたビジネス志向の強い母の姿は、家庭内でも外でも性別役割に縛られない価値観を育んだ。祖母や地域の女性との血縁を超えた関係性に支えられて育った経験は、後の研究姿勢の基盤となった。

86年に琉球大学法文学部文学科英文学専攻に進学。芸術分野への進学も考えたが、予備校時代に海外へ渡航した経験を通じて外国語の必要性を実感し、英文学専攻を選んだ。大学では米国でPh.D.（博士号）を取得した山里勝己教授らの指導を受けた。文部省の留学制度によりミシガン州立大学に留学。言語の壁に直面した経験が進路を定め、ペンシルベニア州立インディアナ大学でPh.D.（英米文学）を取得した。

90年代のアメリカは多文化主義が広がり、文学研究でもフェミニズム批評が台頭していた。白人男性中心の文学史が問い直され、エスニック文学や女性文学の再評価が進む中で、研究への充実感を得た。黒人フェミニズムに共鳴と同時に限界を感じていた矢先、転機となったのが先住民文学との出会いであった。95年の沖縄少女暴行事件を契機に、沖縄の経験、先住民文学、ポストコロニアル批評を重層的に結びつけて考えるようになる。

96年、帰沖とともに琉球大学法文学部講師に就任した当時、大田昌秀知事が日本政府に異議を唱える姿を目の当たりにし、フェミニズム批評の視点から、沖縄の政治的・歴史的位置を問い直すようになる。2003（平成15）年に崎山多美と出会い、沖縄文学を独学で読み進める中で、沖縄女性の経験を黒人や先住民の経験と重ねて捉える視点が形成された。その成果として編著書『沖縄ジェンダー学』全3巻（大月書店、2014-16年）を刊行。文部科学省の研究助成によって実現したこの経験から、大学は国家と社会の狭間で批判的知を育てうる場であるとの確信を深めた。

28年間にわたり琉球大学の教員として、理論と社会実践を往還する教育と運営に関わり、女性が少ない役職を引き受ける経験を重ねた後、2025（令和7）年4月、全国85の国立大学等法人の中で、医学部・大学病院を持つ総合大学として初の女性学長に就任した。立候補の意思はなかったが、「立候補する女性すらいない状況はおかしい」という同僚の言葉に背中を押されたという。「私にもできたから、あなたもきっとできる」というメッセージを示したいと語る。その姿勢は、沖縄に根付く祖母の口癖だった「思（うむ）とけーじゅんにないさ（意志は自ずと現実になる）」の精神と、多様な人々と対話を重ねながら課題を乗り越えてきた経験を通して、未来への希望を育んできた。

多様性と国際性を掲げるだけでなく、異なる価値観と折り合いをつける力こそが、平和を支える「技術」であり、大学が養うべき力である、そして「優しさ」は教育によって育まれるものであり、その価値を実践できる人材を社会に送り出すのが、大学の責務の一つであると信じている。

（宜野座綾乃）

入学式で式辞を述べる琉球大学長の喜納育江＝2025年４月４日、宜野湾市の沖縄コンベンションセンター（琉球大学提供）

（近影）

當山冨士子

Toyama Fujiko ● *1947-*

公衆衛生看護婦から
沖縄戦トラウマ研究へ
401人を面接調査、実態明らかに

當山冨士子は1947（昭和22）年、那覇市具志で生まれた。70年、琉球政府立那覇看護学校公衆衛生看護学科を卒業し、那覇保健所座間味駐在の公衆衛生看護婦（公看）となる。米軍のヘリに乗っての赴任だった。公看は医療体制の乏しい戦後の沖縄で地域医療（特に予防活動）を担った専門職で、離島・へき地への2年間駐在も課され、「公看さん」と呼ばれて住民に親しまれた（日本復帰後は日本法に合わせて保健婦、保健師と名称が変わる）。

高校卒業後は音楽の道に進みたかったが諸事情で断念し、学費無料で奨学金も出るという看護学校へ入学した。患者さんを歌で励ますこともできるだろうと当時は考えていたという。しかし冨士子はその後、思いもよらなかった精神衛生研究の深みへと導かれていくことになった。

冨士子は座間味で前任者から66年実施の「沖縄精神障害者実態調査」に基づく該当者のリストを引継いだが、どう対応すべきか戸惑うばかりだった。具志頭村（現八重瀬町）の駐在に異動後、復帰前後から沖縄の地域精神医療の前進に尽くした島成郎医師を中心とする精神衛生勉強会で学びを深め、77年に琉球大学保健学部（当時）精神衛生学教室の助手に採用された。

結婚・出産を経ながら、粟国島での精神衛生巡回相談や保健師たちとの業務研究会を続け、多くの患者との出会いを通して沖縄戦の残した心傷という精神衛生の課題が見えてきた。トラウマという言葉がまだ知られていなかった時代だ。精神衛生学教室の佐々木雄司教授に「沖縄の人がやるべきことだ」と励まされ、論文「本島南部における沖縄戦の爪跡-精神障害者40例を中心として」を書いた。

91（平成3）年には文部省内地研究員として東京大学医学部保健学科精神衛生学講座に籍を置き、翌年に論文「本島南部―農村と沖縄戦―精神衛生の問題を中心に」で保健学博士号を取得。95年に琉球大学を助教授で退官後、私立の精神科病院の閉鎖病棟で看護師として勤め、99年の沖縄県立看護大学開学と同時に看護学部精神保健看護領域の教授に就任した。

看護大学での多忙な日々の中で大学院の設置に尽くしたことは特筆すべき功績だ。看護大学は開学時から大学院設置に向けて動き出していた。琉大時代に10余年かけても後期博士課程が設置できない状況を見てきただけに、冨士子は当時の上田礼子学長を支えるスタッフとして大学院設置の認可申請業務に積極的に関わった。

幾多の困難を乗り越えて設置が実現したのは2004年。修士課程と博士課程を同時認可というのは全国的にも珍しい事例だったという。

退官前の12 年に実施した沖縄戦体験者401人への大規模な面接調査で、その約4割がPTSDのハイリスク者である実態を明らかにできた。退官後も戦争PTSDに苦しむ人々と関わる中で、この人たちにとってあの戦争はまだ終わっていないのだと実感する。

冨士子自身も戦没者の遺族だ。沖縄戦時、旧沖縄県立第二高等女学校の4年生が学徒看護隊となり22人が戦死、その中に姉のフサ子がいた。二高女の「白梅同窓会」が長年にわたって白梅之塔で主宰してきた慰霊祭を、現在は冨士子が理事を務める「一般社団法人白梅継承の会」が執り行っている。

80年経ても戦争の悲しみや苦悩は癒えず、「戦争トラウマ」は本人だけでなく子や孫まで連鎖する。その現実を長年見つめてきた冨士子は、二度と戦争を起こしてはならないという決意を日々新たにしている。（豊見山和美）

座間味村での公衆衛生看護婦時代 =1973 年

原喜美

Hara Kimi ● *1916-2018*

（1991年頃撮影）

キリ短女性学長、同時通訳講座開設
海外視野、４年制大へ布石

1916（大正5）年東京に生まれる。東京府立第一高等女学校で河井道（1877-1953）にキリスト教を学ぶ。道は29（昭和4）年の恵泉女学園（現恵泉女学園大学）創立者であり、57年にアメリカ超教会派教会から沖縄キリスト教学院を創設した沖縄キリスト教団に派遣された宣教師、前田伊都子の恩師であった。

沖縄キリスト教学院は、那覇市首里当蔵にあった沖縄キリスト教団首里教会で牧師の仲里朝章、前田伊都子、ウォルター・W・クライダーらが沖縄戦で精神的支柱を喪失した若者たちにキリスト教の精神を指し示し、沖縄再建の人材を養成することを目的に設立した。72年沖縄の本土復帰に伴い学校教育法による短期大学となり、89（平成元）年、西原町に移転した。91年、喜美は75歳で学長選挙により第5代学長に就任した。就任以前、37年津田塾専門学校を卒業、51年アメリカシカゴ大大学院を修了する。この渡米は、夫や妹に子どもを託しての単身留学であった。72年、アメリカミシガン州立大学大学院で博士課程を修了する。教授として津田塾大学、国際基督教大学、四国学院大学、香川短期大学、フィリピン女子大学、インドネシアバジャジャラン大学などで教壇に立ち、東京神学大学終身教授を辞しての学長就任であった。

第5代学長選挙の際、当時選挙準備委員であった山里恵子教授、喜友名静子教授らが喜美を推した。山里は、「グローバルに活動されたエキュメニュカル（超教派）で、初めての女性候補、初めて県外の人に要請した」と振り返る。山里はまだ面識のなかった喜美に、事前に上京し直接会った。印象はりりしさと同時に物腰の柔らかさを感じさせる人柄だったという。喜友名は、「学長要請を承諾したのは沖縄戦に対する贖罪（しょくざい）もあった。沖縄に心を寄せていた」と、喜美の心情を推察する。

99年、喜美が学長として最後の月曜礼拝で述べた一節で、学長就任3日前の出来事を振り返っている。東京神学大学の学生らとフィリピンのミンダナオ島へカヌーで奉仕活動に出かけ、突風で海へ放り出されるも幸いに無事全員帰国したことを明かしており、山里は「喜美の力強い奉仕の精神と働きぶりに驚いた」と話す。

96年、山里は学長就任二期目の喜美から「同時通訳集中講座」の開設を命じられた。8月初旬の2週間、全国に門戸を開いたこのプロジェクトは4年制大学創設の布石であり、山里はグローバル社会へ貢献するという学長の先見の明に従った。幸い、喜美の人脈から同時通訳養成の第一人者、斉藤美津子（1925-2004）の協力が得られ、プロの同時通訳者を講師に招へいした。受講生の中から第一線で活躍する通訳者が育った。さらに喜美は、「キリ短の優秀な学生が沖縄の小世界で満足しないように」と、海外で学べる機会を提供すべく、ミシガン州立大学、ノースウェスタン大学、ハワイ大学コミュニティ・カレッジ、フィリピン・ウイメンズ大学など交流協定締結に尽力した。喜美が2期8年の任期を終えた5年後の2004年、沖縄キリスト教学院大学の4年制が実現した。

喜美は、ガールスカウト極東連盟理事として働き、第4次県男女共同参画立案、国際交流、平和教育にグローバルな視点で携わり、その働きや方生き方を通して沖縄の女性たちを鼓舞した人であった。2018年1月召天。（伊芸久子）

ミシガン州立大ミラー教授を囲んで、海外研修説明・懇談会 =1995 年ごろ

（2003年撮影）

外間米子

Hokama Yoneko ● *1928-2005*

沖縄女性史研究を先導
政治参加を促進、
多様な声のまとめ役に

外間米子は1928（昭和3）年2月21日、父・仲地喜行、母・キヨの長女として那覇市に生まれた。両親とも小学校教師だった。沖縄県立第一高等女学校に入学した40年、両親が今帰仁村の小学校に異動になったため、親きょうだいと離れて祖母と暮らすことに。

軍国少女だった米子は、44年3月の卒業から数日後、学友たちと女子挺身隊の結成に参加するが、情勢の悪化で県外派遣が中止となり、両親の赴任先の国頭村へと居を移した。学友たちは日本軍の陣地構築作業や各部隊の軍属となり、沖縄が戦場となってからはひめゆり学徒の看護要員として従軍し、日米の戦闘に巻きこまれて多くが犠牲になった。

49年3月、両親の異動で那覇にもどった際に友人たちの死を知った米子は、生き残っていることの恥ずかしさと後ろめたさで、親戚や友人・知人に会っても目を合わせることができないほど落ち込んだ。しかし一念発起し、友人たちの戦争体験を聞き回り、とりつかれたように沖縄戦の本を読みあさった。この経験が、後に米軍支配下の女性をとりまく〝光と影〟に目をむけ、沖縄女性史研究の基礎を築くことになる。

50年、『うるま春秋』創刊号の懸賞小説に入選したことを機に、うるま新報社（琉球新報社の前身）編集局に入社した米子は、沖縄婦人連合会（婦連）などの取材を精力的に行った。しかし、米軍による言論統制の限界を感じ、同僚でかねて婚約していた外間政彰が琉球契約学生として上智大学に進学したこともあり、53年に退社して上京、アルバイトをしながら新婚生活を送った。そして55年6月の第1回日本母親大会に準備段階から関わったことで、東京在住の女性活動家たちとの人脈ができ、米子の生き方に大きな影響を与えた。

56年に帰郷すると、婦連会長の竹野光子から機関紙の作成を持ちかけられ、「おきなわ婦連新聞」の発行に携わる。広告取りから取材、執筆編集まですべて一人で担当した。日本国憲法が認められない米軍支配下で、婦連の運動が実って57年1月1日から新民法が適用されることになり、それを記念しての第一号発行だった。ところが、8年後の第96号を最後に米子は婦連を去る。竹野会長との意見の違いが大きかった。

それから3カ月後の65年5月、米子は自身を編集・発行人とする「沖縄の婦人」を創刊した。女性たちの直面する問題を紹介しながら、その解決にむけ、4年間45号の紙面で女性たちの声を積極的に取り上げた。また一方で、市川房枝とのつながりで日本婦人有権者同盟沖縄支部を立ち上げ、女性の政治参加を促していった。そして、67年に結成された沖縄婦人団体連絡協議会（婦団協）に取材以外でも参加するようになり、78年の第二次婦団協では事務局長として、主義主張を超えた女性たちのまとめ役を担った。とりわけ、80年の「トートーメー（位牌）は女でも継げる」と、女性に不利な慣習の見直しを求めた米子たちのキャンペーンへの取り組みは、沖縄フェミニズム運動の先駆けといえるものだった。

2005（平成17）年11月、心不全のため77歳で急逝する直前まで、米子は沖縄女性史研究に携わる後輩たちの先導役となった。その恩恵を被った一人としてリスペクトに堪えない。（宮城晴美）

紅一点のうるま新報記者（石川、親慶原を経て那覇市三原に移ってきたうるま新報社屋の前で）1951 年

宮城晴美

Miyagi Harumi ● *1949-*

沖縄の家父長制に焦点を当て女性が生きやすい社会を追究

（2025年12月撮影）

なぜ「集団自決」は起こったのか、また「トートーメー（位牌）継承問題」や米軍による性犯罪―。激動の時代を生き抜く沖縄の女性たちの歴史や現状を、沖縄女性史家の宮城晴美は問い続けている。

1949（昭和24）年11月2日、父・宮城昌弘と母・初枝の長女として座間味村で誕生した。たとえ相手が教師であったとしても、おかしいと思ったことを指摘するような子どもで、小学校時代に、方言を使う生徒に対して差別的な発言をする教師に反発したこともあった。

65年に入学した糸満高校時代に、はじめて沖縄の置かれた状況を知ることに。国語の教師に誘われて復帰運動に参加し、当時生物教諭だった瑞慶覧長方（元沖縄社会大衆党委員長）の授業では、米軍支配下の沖縄の現状を学んだ。幼い頃から、「集団自決」を生き残った祖父母や親族に囲まれて育った晴美は、友人たちが「集団自決」を知らず、それが座間味特有の事例であることに衝撃を受ける。

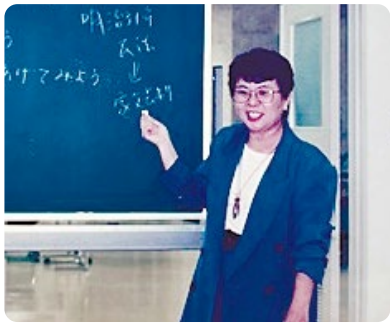
大学入学後、安仁屋政昭（沖縄国際大学名誉教授）の講義を受講したことをきっかけに、沖縄の歴史に関心を持つようになった。「集団自決」について書いたリポートが縁で、安仁屋が携わっていた『沖縄県史第10巻―沖縄戦記録2』（沖縄県教育委員会）に、座間味村民の戦争体験を採録し掲載した。

就職した沖縄の月刊誌『青い海』で企画した「沖縄戦33回忌特集」を機に改めて「集団自決」を取材した際、女性たちが共通して発した「アメリカーに犯されるくらいなら、死んだ方がまし」という言葉にひっかかった。なぜ命に代えてまで、体を守らないといけないのか。その疑問が晴美を女性史に向き合わせる。85年から『座間味村史』の編さんに携わりながら「うないフェスティバル」の運営に関わり、そこで出会った女性たちのエネルギーに触れたことで、本格的に沖縄女性史を学ぶことを決意した。

男性にとって都合の良い女性像を描いた、既存の沖縄女性史に疑問を抱いて独学で女性史研究に取り組み、家父長制による支配が女性たちを苦しめてきたという答えにたどり着く。「集団自決」では、夫の「所有物」である妻が敵にレイプされて身ごもることは絶対に許されないとする思想が、米兵が迫る中で家長が妻や子どもを手にかける悲劇の引き金になった。

また、「トートーメー継承問題」についても、家父長制の影響が根深く残り、女性が継ぐと「たたり」があるという思想が問題の根本にあると指摘した。戦後の多発する米軍の性犯罪に対しても、「被害に遭うことは恥」と被害女性を責め、声をあげにくい社会になっていることを指摘する。

90（平成2）年から那覇市役所職員となり、県内初の行政による女性史『なは・女のあしあと（那覇女性史）』全3巻を編集刊行した。また沖縄県史編集委員会委員として、2016年に発刊した『沖縄県史　女性史』に関わり、都道府県史では初の女性史として評価された。今後も、家父長制を背景にした沖縄社会における女性の位置づけを明確にし、本の出版や講演などを通して女性が生きやすい社会の手助けとなる活動を続けていく。（宮田麻衣子）



那覇市役所退職後、県内大学でジェンダー論や沖縄女性史を講義する宮城晴美＝2015年

（2016年3月撮影）

もろさわようこ

Morosawa Yoko ● *1925-2024*

島々の祭祀に解放の原点見出す 沖縄の女性史研究に影響

もろさわようこ（本名両澤葉子）は1925（大正14）年2月13日、長野県東部に位置する北佐久郡本牧村（現佐久市）の農業、両澤育与、ヤスジの次女として生まれた。尋常高等小学校卒業後、働きながら独学で勉強し、42（昭和17）年に難関の専門学校入学者検定資格取得。東京大空襲後に帰郷し、地元に疎開してきた陸軍士官学校生徒隊本部の筆生として敗戦を迎える。

国のために命を懸ける価値観が一変し、権力側の言葉は「その意図は何かを自分で検証しないうちはうなずかない」と決意。憲法を道標に、自らの言葉に責任を持って戦後を歩み始める。新聞記者、紡績工場企業内学院の教員を経て49年に上京。女性参政権の実現に尽力した市川房枝に見いだされ、月刊誌『婦人展望（現女性展望）』の編集者となる。フランスの女性思想家・哲学者のボーヴォワールの影響を受けて1作目の『おんなの歴史』を65年に出版。蔑視的な「おんな」をあえて使って女性差別を見据え、ジェンダーの概念が一般的でなかった当時からジェンダー視点で社会構造を批判した。第23回毎日出版文化賞を受賞した『信濃のおんな』（1969年）は地域女性史の嚆矢（こうし）と評価される。

女性史でアジアへの侵略戦争を支えた日本女性の戦争責任を巡る議論が70年代半ばに本格化する前の71年に女性の「共犯性」を批判。60年代から被差別部落やアイヌ、沖縄の女性らとの連帯を模索した。72年に沖縄を初めて訪れると、沖縄を「女性史の宝庫」と捉え、宮古や八重山諸島など各地を取材。生活や祭祀を主体的に担う女性たちの姿に女性解放の可能性を見いだす一方、女性たちが権力構造にからめ捕られ、支配構造を再生産する役割を果たした点も見逃さなかった。

70年代から「沖縄の女性史は、沖縄の女たちの共同体的集団作業によって発掘してほしい」と繰り返し訴えた。その発言に触発されるように、沖縄県婦人連合会など女性史の出版が盛んに。女性史への関心が高まる79年、琉球新報社主催の女性史連続講座で講師を務めると、受講者を中心に女性史研究グループ「沖縄の女性史をひらくつどい」が発足。那覇市内のアパートに拠点を構えて、上江洲トシ、伊波圭子、島本幸子、新垣匡子らと親交を重ねた。

講演・執筆の一方、自由・自立・連帯の交流施設「歴史を拓くはじめの家（現志縁の苑）」を長野県に開設し、人々との交流から新しい連帯を生み出そうとした。94（平成6）年には平和を考える「うちなぁ」を島尻郡玉城村（現南城市）に造り、県内の女性行政担当者たちが集まって学習を重ねた。参加者が母や自身が語り合った戦争体験を『オキナワいくさ世のうないたち』（2004年）として刊行。沖縄県女性総合センター（当時）の開館翌年の97年には評論家神崎清の妻かほるから託された女性史関係蔵書839冊を同館に寄贈。現在、その多くが沖縄県立図書館に収蔵される。

一連の活動が評価されて2005年に長野県の文化顕彰「信毎賞」を受賞。晩年に著作の復刊など再評価が進み、24（令和6）年2月29日に99歳で亡くなると大きく報道された。（河原千春）

久高島でエラブウナギの旅場を見学するもろさわようこ＝1972年ごろ

コラム　琉球語と女性たち

語られる言葉 丹念に

UNESCOにより消滅の危機にある言語として、アイヌ語とともに琉球語（八重山方言、与那国方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言）が指定され、20年になろうとしている。

言語は、さまざまな事物、事象を表現する媒体であると同時に、言語そのものも文化である側面を持つ。琉球語も琉球・沖縄文化を表現してきたのであり、琉球語によってのみ可能な表現が琉球・沖縄地域にひろがる個々の文化を顕現させてきた部分もある。いわば琉球語という羊水の中で琉球・沖縄文化は育まれ、保たれてきたと言えよう。

何度も意識された“消滅”

ところで、言語は時間と共にその姿（語形）が変化していく性質を持っている。世界中のどの言語もそうであり、琉球語も例外ではない。琉球語は、日本本土方言と同一のルーツである日琉祖語から派生し、中世、近世、近代、現代という長い時間のなかでそれぞれ語彙や文法、発音等に変化をかさね、互いに距離を取っていったとされる。UNESCO は2009年時点で琉球語が消滅の危機にあるとしたが、時間軸上に置いて見直すと、ここで消滅危機にあるとされているのは、近世から近代において活きてきた琉球語のことを指している。

実はUNESCO よりもずっと早い時期に、琉球における言葉が変化・消滅していくことについて危機感が示された歴史的場面があった。時代を300年ほど遡る1711年（尚益王2年）、当時の首里王府は「遺俗流風の言」（祖先の遺した風俗や美風をまとった言葉）が減少していく実態に憂慮を示し、古老から語彙を聞き集めて『混効験集』という書物を公的に編んでいる。

ここでいう「遺俗流風の言」とは、近世琉球期の時点でより古い言葉、つまり『おもろさうし』が編まれた中世琉球期に活きていた琉球語ということになるが、その中世における琉球語について首里王府は、「尚賢尊君御宇下つかた三代に使奉る一人の官女」（尚賢王から三代にわたって仕えた一人の官女）の協力を得て、その言葉を収集・記録している。

一例紹介すると、「まめな　おやしの事豆菜なり」という一文が『混効験集』にみえる。これは祖先が用いた美風をまとう語として「まめな」という語があり、それは首里では通常「おやし」と呼ばれているもののことで、いわゆる「豆菜」（モヤシ）のことだと説明している文章である。

現代琉球語でモヤシはマーミナ（首里）、マミーナ（今帰仁）など、語源的に「まめな」に遡れる方言呼称が聞かれるが、王国時代の首里では「まめな」系統の呼称は廃れ、代わりに薩摩地方からの借用語である「おやし」が主に用いられていたという、首里方言の移り変わりがその背景に見える。

近世琉球期そして現代と、琉球語の消滅は歴史上たびたび意識されてきたことが分かる。また、消滅危機に抗おうとする国家的な動きも都度あったのである。

語彙集　方言辞典

さて近世期に『混効験集』の編集に協力した官女のように、近現代においても、琉球語継承の役割を担った女性たちがいる。

日本復帰前の沖縄で、首里出身の島袋盛敏は首里方言を収集し1963（昭和38）年に『沖縄語辞典』を刊行した。島袋は「自身の語彙」をはじめ、妻のトシ、琉球王国末期を過ごした義母の国頭ツルの語彙を記録、約1万5000語を収載した。ツルは

菊千代・高橋俊三著『与論方言辞典』（武蔵野書院刊、2005 年、品切れ）=左奥=と『石垣方言辞典』（沖縄タイムス社、2003 年）

集め文化後世に

照屋理(名桜大学教授)

1863年(尚泰王16年)生れであり、琉球王国時代の非常に貴重な語彙が辞典に記されているということになる。

例えば収載された語彙のうち、ウヤシという語を見てみよう。「もやし。おとなの使う語。普通maaminaを多く用いる」とある。つまりウヤシとは、『混効験集』で薩摩からの借用語として説明されていた「おやし」の訛った語である。近世の首里では、借用語として首里に広まっていた「おやし」という語彙が、王国末期には廃れて「おとなの使う語」になっており、マーミナ(まめな)という方言呼称が復権していることがうかがえる。近世琉球期から近代沖縄の首里で過ごしたツルの生活実感が伝わる部分のように思う。

首里以外の地域では、『石垣方言辞典』が、石垣島出身の宮城信勇およびその御母堂である宮城文(1891~1992年)の語彙を記録して2003(平成15)年に刊行された。文は『戦後50年 おきなわ女性のあゆみ』に収録されている女性でもある。同書では八重山で初の女性議員であり、『八重山生活誌』を発刊し第1回伊波普猷賞受賞者として紹介されている。文は『広辞苑』にある一語ずつを石垣方言に訳すという方法で『石垣方言辞典』の制作を地道に、かつ真摯に進めたという。収録語の中には、女性の衣服や病気に関する用語、女の子の遊びなど男性の話者のみでは行き届かない細かな生活語彙が多く散見される。親子による二人三脚の結晶として成った辞典は1万7600語を収録し、第31回伊波普猷賞を受賞した。

奄美でも女性が貢献

同じく琉球語とされる奄美方言についても、代表的な辞典制作に貢献したのは女性たちである。『奄美方言分類辞典』は、奄美大島出身の長田須磨(1902~1998年)によって自身の語彙を中心に記録され1980・1981年にそれぞれ上・下巻として刊行された。収録語数は、他の辞典との体裁の相違もあり不明だが、上下あわせて2000頁に及ぼうかという大著である。

また『与論方言辞典』は、与論島出身の菊千代(1927~2022年)によって2005年に刊行された。千代は与論民具館(現与論民俗村)を設立・運営する傍ら、年配の方々の話す方言語彙をメモした。また家族の協力も得つつ語彙を集め、収録語彙数は約1万6000語となった。

数多くの方言辞典が、近現代において編まれてきた。琉球語においては、困難を伴いかつ問題意識が不可欠な辞典制作という作業に、女性が多く関わっており、時に女性自身が主体となって立案がなされ、周辺の人々を巻き込みながら強力に推進され、その難行が達成されてきた。価値観の画一化が著しい昨今において、方言辞典は単なる古い言葉のコンテナではなく、各方言語彙で表現された文化の存在を後世へ確かに伝えるものである。地域があゆんだ歴史を見つめ直すよすがともなるものを上記の女性たちは世に産した。その可能性を拓き、大事に育てゆく作業が今に託されている。

9月18日の「しまくとぅばの日」制定記念式典 =2006年9月18日、那覇市の県立郷土劇場(琉球新報社提供)